

生徒の主体的参加を促す「考え、議論する」道徳教育プログラムの開発(3)

担当者 室井麗子*, 佐々木淑乃**, 大瀧 航**, 宇佐美公生*

* 岩手大学教育学部, ** 岩手大学教育学部附属中学校

(令和3年3月4日受理)

I. はじめに

本研究は、教科化された「特別の教科 道徳」の授業実践に「考え、議論する」要素を盛り込みながら、いかにして児童生徒の主体的参加を促すことができるかを主目的として2019年度から継続されている研究である。このような研究目的のもと、本年度(2020年度)も、岩手大学教育学部附属中学校での道徳科の授業実践を通して開発されたプログラムとその成果・課題を、さらなる実践とその考察・分析を通して検討した。また、岩手大学教育学部の必修科目「教職実践演習」(2020年度)での実践では、特に「哲学対話」に焦点を絞り、児童生徒が主体的に「考え、議論する」道徳科授業の主たる方法として哲学対話を導入・実践するに際しての課題を検討した。

昨年度(2019年度)の研究では、生徒たちの多面的で多角的な思考を促しつつ、道徳的諸価値の理解にも資する実践の試みとして、複数の時間をユニット化することで、複数の内容項目を包み込みつつ、統合的なテーマのもとで全体を振り返り、生徒各自の思考の深まりを促すというプログラムについて検討した。生徒たちには、複数の内容項目を関連させて、それぞれの意義を多面的・多角的に考えさせたり、複数週にわたって継続的・総合的に考えさせることで、思考の深まりが見られることを確認することができた。今年度は、この試みの範囲を広げ、小単元ユニットを組み合わせた大単元ユニットとして年間の計画を組み、さらに小単元ユニットを通じた振り返りの可視化を図ることで、学びの変容を教師が把握できるだけでなく、生徒自身が自覚化を促すと共に、有意義な評価の可能性を開くことを試みている。以下の「II. 実践①」は、そうした中学校での実践の記録とその成果、そして課題についての考察である。

「III. 実践②」では、「考え、議論する」道徳科の授業実践のための有効な方法として注目され、近年、ますます導入・実践が進んでいる「哲学対話」に、上述のとおり、焦点を絞った。哲学対話を中心に据えた小学校での道徳科の授業を受講生に立案・実践してもらい、その考察を通して、特に、道徳科授業に哲学対話を導入・実践するに際しての課題を提示し検討した。

II. 実践①: 「考え、議論する道徳」の授業 ——中学校における実践

昨年度、岩手大学教育学部附属中学校では、「考え、議論する道徳」の実現に向け、「小単元的プログラム(パッケージ型ユニット)を位置付けたカリキュラム・マネジメント」に加え、年間計画の見直しと、一単位時間の授業構想の側面から実践を行った。その成果(○)と課題(▲)は以下の6点である。

- 年間指導計画を立てたことで見直しをもって資料の選択ができるようになった。
- 一単位時間の授業の流れのベースを作ったことで、生徒に何を考えさせたいかということや、適切な学習過程について、ねらいを持って授業に臨めるようになった。
- ユニットの振り返りを1枚のワークシートにしたことで、生徒も教師もユニットでの考えの変容などを見取ることができるようになった。また、具体的に生徒に返す評価方法についても考えることができた。

▲意図的なユニットの構成の検討

▲道徳的な見方・考え方を位置付けた一単位時間の授業の工夫

▲学びの自覚化を促す評価の工夫

これらを受け今年度は、年間計画に位置付けた

小単元型ユニットに加え、ユニットにおける振り返りシートの見直しと、一単位時間の学習シートの工夫といった側面から実践を行った。

(1) ねらいと具体的な手立て

本校道徳科では、価値観が多様になる現代だからこそ、何が問題かを道徳的諸価値についての理解を基に判断し、自己を見つめ、他者と議論し、物事を多面的・多角的に考え、人としてのよりよい生き方を主体的に判断し自己決定していく姿勢を育むことが大切であり、そうした道徳科の授業を積み重ねることで、道徳科で目指す資質・能力（道徳性）の育成につながると考えた。以上のことから本校道徳科で育成を目指す資質・能力（道徳性）を、昨年度より次のように設定している。

【育成を目指す資質・能力（道徳性）】

- ①道徳的諸価値が大切なことなどを理解し、様々な状況下において人間としてどのように対処することが望まれるか判断する力（思考力等）
＝道徳的な判断力
- ②自己を見つめ、他者と協働し、物事を広い視野から多面的・多角的に考える力（協調性等）
- ③自己の生き方についての考えを深め、人としてよりよく生きようと探究する力（主体性等）
＝道徳的な心情、実践意欲と態度

この資質・能力の育成に向け、以下の三つの手立てを今年度の研究の視点として行った。

視点1 道徳科の見方・考え方を働かせる「真正の学びの場」の設定

～本校の年間計画に位置付けた小単元型ユニット～

- ① 年間35時間の道徳科授業を大単元、つまりユニットとして捉える。
- ② 学期ごと、節目ごとに自校の道徳的実態や道徳教育重点目標に照らして重点的指導内容を明らかにする。
- ③ 年間指導計画に小単元プログラム(パッケージ型ユニット)を組み込む。

※以下、③を「ユニット」と表記する。

昨年度の研究で再検討した年間計画を基に、行

事との連携を図りながら、より効果的なユニットを組めるよう修正した。年間の大きな行事を活用し、道徳科で立てた各学年の重点項目についてユニットを組んで授業を行うことにより、学びを深めたり広げたりできると考えた。

例として、表1に示す通り、1学年「仲間との出会いを大切に」をテーマとする場合、7月に行われる生活トレーニングセンターでの学びと関連付けるために、以下のようにユニットを組んだ。

ユニット名	各教科・領域、行事と道徳教育との関連	重点指導内容
ユニット1 仲間との出会いを大切に	HS(生活トレーニングセンター)	C(11)公正、公平、社会正義 B(9)相互理解、寛容
ユニット2 みんなで目標達成!	特別活動(文化祭)	B(6)思いやり、感謝 C(15)よりよい学校生活、集団生活の充実
ユニット3 先輩になる	附属小学校交流	A(3)向上心、個性の伸長、(4)希望と勇気充ちた強い意志、(20)よりよい生き方

【表1 第1学年小単元型ユニット例】

1学年は入学して初めての大きな行事が、総合的な学習の一環として行われる生活トレーニングセンターであった。新しく出会った仲間と様々な活動に取り組むことを通して、自分自身や自分たちの生活を見直し、新たに出会った仲間とともにこれから始まる中学校生活をより充実させようとするものである。

生活トレーニングセンターを行うにあたり、道徳科では、学年重点指導内容である【B(9)相互理解、寛容】、【C(11)公正、公平、社会主義】の二つの内容項目の資料をユニットに組み入れながら学習を行った。その後の、生活トレーニングセンターや総合的な学習の時間での学びを経て、道徳科で考えたことが、より深まることにもつながるのではないかと考える。

視点2 主体的・対話的で深い学び等による「学びの自覚化」

～ユニットにおける一単位時間、ユニット全体を通した学びの自覚化を促す振り返り～

昨年度より、ユニット（詳細は前述）における自身の考えの変容や深まり、その要因や過程などを自分自身で気付くことができるようにするため、

また、それを教師の見取りに活用するため、振り返りシートを用いて学習を行っている。

ユニットとして行う授業では、一単位時間ごとの振り返りを一枚のシートに書きまとめていく。そうすることで、ユニットの中で考えたことを、ひと目で分かるようにすることができる。さらに、ユニットの最初の授業と最後の授業では同じ問いで振り返りを書かせることにより、ユニットを通じた考えの変容や深まりを生徒が自覚することができ、さらに、教師も見取ることができる。ただし、前年度の振り返りシートは記入欄が多いことにより、授業内で書ききれないこと、生徒の学びが分かりにくいことが改善点として挙げられた。そのため今年度は、生徒の学びが端的にまとめられるよう記述量と記入の視点に改良を加えた。「考える道徳への転換に向けたワーキンググループにおける審議の取りまとめ」では、道徳科における「見方・考え方」を、道徳科の目標から「様々な事象を、道徳的諸価値の理解を基に自己との関わりで広い視野から多面的・多角的に捉え、人間としての生き方について考えること」と示している。これを基に、ユニットの振り返りシートへの記入の視点として、「心に残った仲間の考え」と「自分自身が大事にしたいこと」の2点を一単位時間の振り返りとして蓄積できるようにした、

岩手大学教育学部附属中学校 第1学年 道徳科 1年 組 番 氏名

ユニット1「仲間との出会いを大切に」

【学習前】

「仲間との出会いを大切に」
 ※中学生となり、みんなはまだ新たな仲間と出会い、毎日過ごしています。そんな日々の中、仲間との生活をよりよいものにするために大切なことは何だろうか？

「魚の涙」 月 日 「やっぱり樹里は」 月 日
 [心に残った仲間の考え] [心に残った仲間の考え]
 [大事にしたいこと] [大事にしたいこと]

「一粒の種」 月 日 「私の話を聞いてね」 月 日
 [心に残った仲間の考え] [心に残った仲間の考え]
 [大事にしたいこと] [大事にしたいこと]

【ユニット学習を振り返って】

「仲間との出会いを大切に」
 ※中学生となり、みんなはまだ新たな仲間と出会い、毎日過ごしています。そんな日々の中、仲間との生活をよりよいものにするために大切なことは何だろうか？

※今の自分が大事にしたいこと※

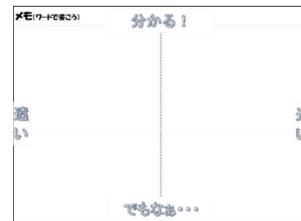
※これからやってみたいことや、考えたいこと(疑問に思ったこと)があれば書きましょう※

【図1 第1学年小単元型ユニット振り返りシート例】

手立て3 道徳科における「情報・情報技術」の活用
 ～学年に応じた思考ツールの活用～

一単位時間ごとのワークシートのメモ欄に思考ツールを設けることにより、生徒の思考が整理される。そうすることで、グループでの対話において、自分の考えを表出させやすくする、仲間の考えを取り入れやすくし、生徒自身の考えを広げたいと考えた。

ただし、思考ツールの効果的な活用を促すため、学年の発達段階に応じ、1学年は教師による提示、2学年は教師による複数提示から生徒による選択、3学年は自由な活用を目指すこととした。



【図2 第1学年ワークシートのメモ欄の例】



【図3 第2学年思考ツールの例】

(2) 実践の内容

①実践I：第1学年小単元型ユニット『仲間との出会いを大切に』の四時間構成

- 一時間目『魚の涙』
 - 【C (11) 公正, 公平, 社会主義】
 - 二時間目『やっぱり樹里は』
 - 【C (11) 公正, 公平, 社会主義】
 - 三時間目『私の話を聞いてね』
 - 【B (9) 相互理解, 寛容】
 - 四時間目『一粒の種』
 - 【C (15) よりよい学校生活, 集団生活の充実】
- 「仲間との出会いを大切に」というテーマについて3つの内容項目で構成したユニットである。『中学校学習指導要領解説道徳編』のC [主として集団や社会との関わりに関する事] から、【(11) 公正, 公平, 社会正義】をユニットの最初に2時間連続で学習する。その次に他者を受け入れるという観点から、

B [主として人との関わりに関すること]から、【(9) 相互理解, 寛容】また, C [主として集団や社会との関わりに関すること]から、【(15) よりよい学校生活, 集団生活の充実】についての題材を加えることで, 一つのテーマについて, 多面的・多角的に考え, 自分自身を見つめ直し, 今後の実践意欲を喚起させたい。これらの学習を通して自分が考えたことや新たに生まれた疑問などを今後の自分自身のテーマとすることをねらったユニットの構成とした。

1学年は入学して約2か月が経ち, 中学校生活へ新たな目標を見出し, 頑張ろうとする生徒が多い。その良さも生かしながら新たな集団生活を創り上げたいと思う一方で, 小学生までの友人関係や考え方が徐々に浮き出てきている。全員が新しいスタートを切った今こそ, これまでの自分の価値観にとらわれず, 新たな考え方を広げ, 様々な仲間の思いを受け入れられる生徒の育成を目指したい。さらに本ユニットは, 総合的な学習の一環として行われる7月の生活トレーニングセンターに向けて構成した。生活トレーニングセンターでは, 仲間と活動する中で何か困難が生じた際に自分自身がどう行動するかが問われるようになる。そこで自分自身の弱さに素直に向き合い, よりよい行動を判断することができるよう, 仲間と過ごす上で大切にしたいことを考えた状態で臨ませたい。そして, 道徳科の学習とHS学習をつなげ, 教科横断的に学習を進めることで, 道徳科での学びをより深いものとさせたいと考え, 三つの内容項目を関連づけながら学習することを考えた。以下に, 四時間にわたる生徒Aと生徒Bの振り返りの記述の例を示す。

【図4 1学年生徒Aの一単位時間の学習シート(思考ツールを用いたメモ)とユニット振り返りシート】



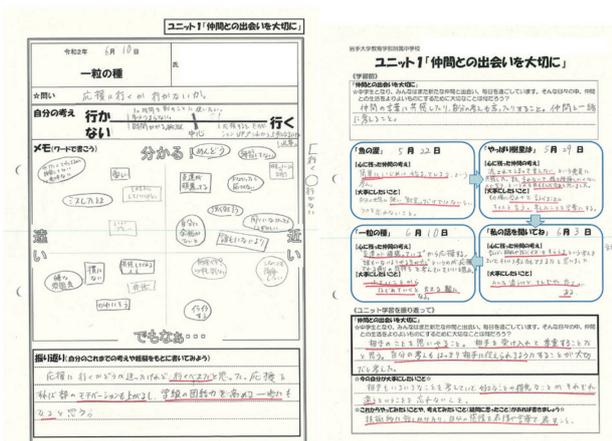
【図5 1学年生徒Bの一単位時間の学習シート(思考ツールを用いたメモ)とユニット振り返りシート】

②実践Ⅱ 第2学年 教材名『ジコチュウ』

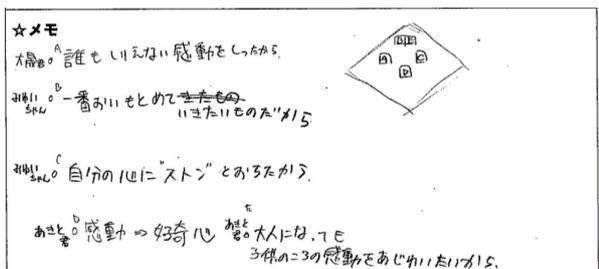
【B (9) 相互理解, 寛容】

今年度の道徳の最初の時間に, キャリアパスポートで立てた目標をもとに, 道徳で学ぶ内容項目において, 「どのような項目に興味があるか」「どの項目について学んでみたいか」というアンケートを行った。アンケートの結果【表1】を分析すると, 【B 主として人との関わりに関すること】の視点に関することに興味を寄せていることが分かる。さらに内容項目について見ていくと, 【(9) 相互理解, 寛容】に関心を示し, 理由としては「コミュニケーションを取るために大切だから」や「相手の考えを受け入れることが苦手だから」, 「相手を理解することで自分を上手に伝えたいから」, 「自分勝手な自分がいるから」などが挙がった。これらのことから, 生徒は理想の自分になるために, 相手を尊重し, 望ましい人間関係を構築することを願っている。

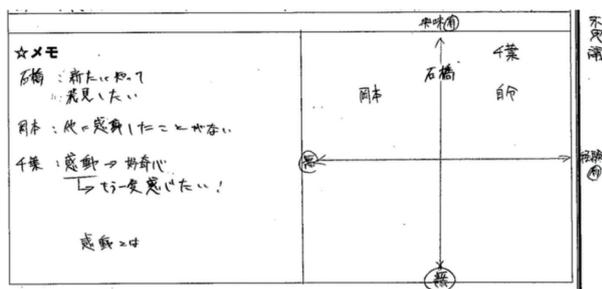
生徒は4月から新たな学級での生活をスタートし, 様々な活動に取り組んでいる。新たなクラスメイトと授業や係活動に取り組んでいるが, 自己開示をためらい, 発言を躊躇することや班で協力して係の仕事に取り組むことに消極的な生徒も見



られる。新しい人間関係の中に身を置くことによる不安を緩和するために、放課前の終会でクイズなどのレク活動を積み重ね、安心して発話できる環境を整えてきた。これを生かし、積極的に自分の経験を発言することを促し、他者の考えから視野を広げ、深い学びになるようにしていきたい。また、昨年から総合的な学習の時間や特別活動の時間において思考ツールを用いて情報を整理する活動に取り組んできた。今までの経験を生かし、思考ツールを用いることで、他者の考えを積極的に受容し、自分の考えと結び付けることで、効果的に道徳的諸価値の理解を深めさせたいと考え、本時を展開した。以下に、本時における思考ツールと用いたメモと生徒Cの学習シートの記述の例を示す。

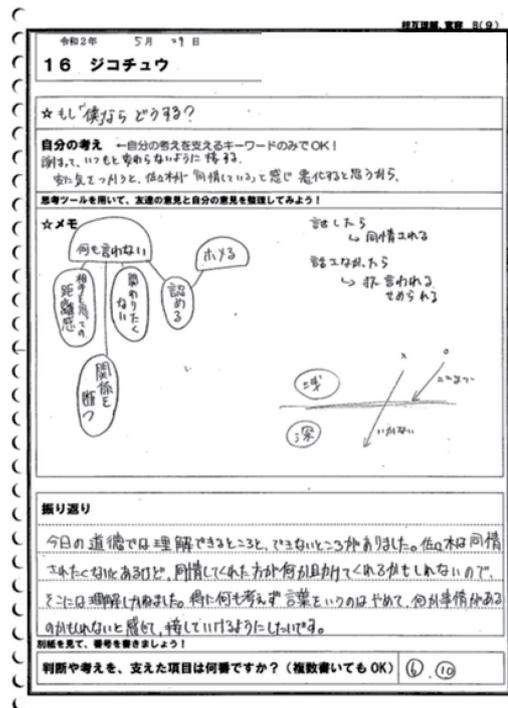


《ダイヤモンドランキング》
 考えを交流しているときにメモをとり、交流後自分が納得した考えについて順位付けすることで思考を整理した。



《座標軸》
 考えを交流しているときに他者の考えを分類して、振り返りに生かした。

【図6 2学年思考ツールメモ】



【図7 2学年生徒Cの本時の学習シート】

実践Ⅰ・実践Ⅱともに、生徒は、思考ツールを用いて学習を行ったことにより、自分自身の考えが整理され、さらに仲間の考えを自分の考えと比較しながら加えていることが分かる。また、実践Ⅰではユニットの前後で、実践Ⅱでは一単位時間の前後において、テーマや課題についての考える視点が増えたことが分かる。

(3) 成果と課題

本実践の成果は以下の三点である。

- 生徒自身に自我関与させる場面を、意図的に一単位時間の中に設けることができた。
- 思考ツールを用いたメモにより、他者の考えを自分の考えに生かそうとする生徒の姿が見られた。
- 一年次研究から、小単元型ユニットの指導の目的をより明確にし、教師、生徒ともに学びの自覚化が図れるような振り返りについて考え、試行することができた。

課題は以下の五点である。

- ▲多面的・多角的な視点を生徒同士の学びの中か

らとらえさせるための、対話の指導を積み重ねること。

- ▲対教師ではなく、生徒同士での対話、生徒の発言から考えが広がる教師のコーディネーター。
- ▲本時の学習にむけて生徒が入り込みやすい導入の在り方。
- ▲自我関与に向かうまでの発問と、自我関与させる発問、問題解決的に考えさせたり、多面的・多角的な視点を与えたりする発問の工夫。
- ▲本時の学習を自分事として考え、道徳的实践意欲を持たせられる振り返りの書かせ方の工夫。
(話し合いの時間とのバランス)

Ⅲ. 実践②：「考え、議論する」道徳と「哲学対話」——授業での実践における課題

(1) 多角的・協動的に「考え、議論する」道徳——「話し合い」から「対話」へ

「実践②」では、児童生徒が自ら「考え、議論する」道徳科授業の方法として注目され、近年実践が進められている「哲学対話」に焦点を絞り、それを道徳科の授業へ導入し実践するにあたっての課題を検討した。

そもそも、教科化以前の「道徳の時間」の中でも、児童生徒同士の言葉のやり取りは、児童生徒がそれぞれの考えを相互的に深化させることを目指す「話し合い活動」として、学習活動の中心に据えられてきた(cf.『小学校学習指導要領解説 道徳編』平成20年)。この話し合い活動は、道徳の教科化と学習指導要領の改訂により、「対話」としてより重視されることとなる。すなわち、そこでは、児童(生徒)が、他者と対話し協働しながら、自ら多様な(道徳的)価値観に対峙し考えるという方向性が示され(cf.『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳』平成29年)、話し合い活動は「対話」として、一層、道徳の授業における重要な学習活動とみなされることになったのである。

このような学校での道徳教育の趨勢において注目されたのが「子どもの哲学教育」であり、その実践の中心に据えられる「哲学対話」であった。

(2) 哲学対話を用いた小学校での道徳科授業

1920年代のドイツにおいて、専門家による哲学テキストの読解・解釈に占有されたいわば“アカデミックな哲学”に対して、ソクラテスが実践したような「対話としての哲学」を復権する試みが起こる。この試みを担ったドイツの哲学者L・ネルズンは、「人びとの経験を記述し、それをもとにして徹底的にグループ討議をするネオ・ソクラティック・ダイアログという活動を開始」するのであるが(河野, 67-68頁)、その一環として試みられた子どもとの対話型哲学が、今日の子どもの哲学教育実践の源流とされる(河野, 72頁)。この子どもの哲学教育は、その後、M・リップマンやG・マシューズらによって大いに発展し、今日世界中で様々な形で実践されている(河野, 71-80頁)。

子どもの哲学教育では、子どもたちが、「探究の共同体」の一員として、「探究の共同体」の中で、身近なテーマや物語、そして互いの経験について、自分たちで議論し共に考え(相互的対話)、自分自身で判断し考え(自己内対話)、そうして、それぞれの思考力や判断力を深めていく(cf.リップマン, 117-150頁; 河野, 7-9頁)。このような、子どもたちの対話によって実践される子どもの哲学教育が、児童生徒が、自ら、協働して、多角的に「考え、議論する」道徳を促進するものとして注目され、小・中学校において実践されているのである。

ところで、子どもの哲学教育で実践される「哲学対話」は、「身近なテーマや物語などを題材として、子どもたちが自分たちでテーマと問題を決め、意見を出し合って、問題についての考えを深め合いながらも、かならずしも結論は出さなくてもよい、といったタイプの対話活動」(河野, 9頁)である。したがって、この実践において、教師は、何かを教えたり、あるいは、予め定められたゴールに子どもたちを的確に導くのではなく、子どもたち自身による対話が促進されるように「手助けする」という役割を担うことになる(cf.河野, 10頁)。より具体的には、①教師は、子どもたちの対話を把握し、それを哲学のテーマにして子どもたちに投げ返す、②教師は、テーマは明確であるが

議論の収束点は設定されていない哲学対話において、子どもたちの多様な考えが否定されることなく、子どもたちが自身で問い続けることができるように手助けをする、③教師は、子どもたちの自由な発言がテーマの深化へとつながるよう、適宜、適切な質問や確認を行う、という役割を担うことになるのである（森田，229-231頁）。

2020年度に実施した「教職実践演習」の「学習の指導 道徳」では、以上のような、子どもの哲学教育と哲学対話の特徴や内容と、そこでの教師の役割について確認したのち、先行例として映画『ちいさな哲学者たち』（2012年，フランス）や映画『ブタがいた教室』（2009年，日本）での子どもたちによる対話場面を観ることで哲学対話のイメージをつかんだ上で、受講生に、哲学対話を学習活動の中心に据えた小学校での道徳科の授業を立案してもらい、その模擬授業を行った。模擬授業は、AグループとBグループの2つのグループに分かれ立案・実施した。Aグループは「みんなにとって友達とはどんな存在なのか考えよう」、Bグループは「楽しい学校ってなんだろう」という課題を設定し、両グループ共に教材および板書を使用せず、主に対話のみで展開される授業を立案し実施した。紙幅の都合上、ここで模擬授業の内容を詳細に記すことはできないが、これらの模擬授業を通して浮き彫りになった、哲学対話を道徳科の授業で実践するに際しての課題を以下に提示しておきたい。

（3）哲学対話を道徳科授業で実践するに際しての課題——「優れた問い手」としての教師の重要性

模擬授業を通して浮き彫りになった諸課題のうち最も重要なものは、子どもによる哲学対話の実践における教師のあり方や関与に関わるものである。「子どもが自分たちで」、多角的に、共に考え、「対話する」ために教師は「手助けする」という役割を担うとなると、そのために教師はどのように関与すればよいのかという戸惑いが往々にして生じ、場合によっては「子どもたちの自主性に任

せる＝教師は可能な限り関与しない」ことが教師の役割であると見なされる。上記の模擬授業においてもそのような場面が多々見られた。しかしながら、子どもたち自身による哲学対話の実践が本来的な意味や次元において成立するためには、実は教師の関与は極めて重要で不可欠なものとなる。そして、この関与（手助け）の内実を理解するためには、そもそも「対話」とは何かということ、その難しさも含めて、しっかりと理解することが必要なのだ。では、「対話」とはそもそも何か？

納富信留によれば、「対話は言葉のやりとりである限りで、「語る」と「聞く」の関係」であるが、「語る＝意味の伝達／聞く＝意味の把握」のみでは対話が成立したとは言えない（納富，34-36頁）。対話においては、「語る＝実行させる／聞く＝実行する・聞き従う」ということを意識しながら「語る＝内容を理解させる／聞く＝内容を理解する」という営為を確保することが重要であり（納富，36-39頁）、「相手の語ることを理解する、けれどもそれを実行するかどうかについては、立ち止まってさらに自分でよく考えて相手に意向を伝える。そこに相互的な言葉のやりとりが起こる。そのようなところが、対話の目指す地点ではないか」と納富は述べる（納富，39頁）。このような営為である対話は、互いの語ることを曖昧なままにせず、相互に問いかけ答え、そうして確かめる作業として具体化されることになるが、これは「問答」としての対話の「もっとも基本的なあり方」であるという（納富，41-43頁）。

したがって、道徳科の授業における子どもたち自身による対話も、上記のような問答を基盤に実践されるべきものであるが（問答が遂行されなければ、そもそも対話自体が成立しない）、納富によれば、問答としての対話は、誰もが上手にできるものではない（納富，44頁）。問答の遂行においては、「的確な問いを發し、問いと答えをつなげながら一つの議論にしていく能力」を有し、決して誘導尋問するのではなく相手を上手く導きその真意を詳らかにすることができ、「相手の意向や趣旨をくみ取り、なおかつそれに対して鋭い反論や問

題提起をぶつけるような質問の仕方」ができる、「優れた問い手」が不可欠なのである（納富，44頁）。ゆえに、道徳科の授業において、以上のような問答としての（哲学）対話を実践するためには、そもそも子どもたちが優れた問い手であることが前提として要請されるが、しかし、他方で優れた問い手は、そもそも、問答としての対話の実践を通して育成されるものでもあろう。ここで重要になるのが、「優れた問い手」としての教師の存在と関与である。子どもたち自身の対話は、問い手として教師が上記のように問うことが手助けとなって成立しうるだろう。そうして実践される問答としての対話が、子どもたちを優れた問い手へと育んでいくのである。哲学対話による子どもが自ら「考え、議論する」道徳科授業の実践においては、優れた問い手としての教師が不可欠なのである。

IV. おわりに

以上、実践①では、生徒が主体的に考える道徳科授業の具体的な実践を提案することができた。同時に、実践②では、児童生徒が自分たちで共に考え対話する実践での教師の関与の重要性と課題とが明らかになった。実践②で浮き彫りになった他の課題については、改めて検討することとしたい。

【参考文献など】

- ・赤堀博行（2017）『「特別の教科 道徳」で大切なこと』東洋館出版社。
- ・岩手県教育委員会『平成31年度 学校教育指導指針』「考える道徳への転換に向けたワーキンググループにおける審議の取りまとめ」。
- ・宇佐美公生，室井麗子，大森史博，板垣健（2015）「子どものための哲学教育を介した道徳教育のプログラムの開発プロジェクト」『教育実践研究論文集』（岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業），第2巻。
- ・宇佐美公生，室井麗子，大森史博，板垣健（2016）「哲学対話教育の手法を用いた道徳教育プログラムと教材の新たな開発」『教育実践研究論文集』（岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業），第3巻。
- ・宇佐美公生，室井麗子，大森史博，板垣健（2017）「哲学対話教育の手法を用いた道徳教育プログラムと教材の新たな開発（2）」『教育実践研究論文集』（岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業），第4巻。
- ・宇佐美公生，室井麗子，佐々木聡也（2018）「生徒の主体的な参加を促す「考え、議論する」道徳教育プログラムの開発」『教育実践研究論文集』（岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業），第5巻。
- ・河野哲也（2014）『「こども哲学」で対話力と思考力を育てる』河出書房新社。
- ・柴原弘志（2018）『岩手県教育センター「『特別な教科 道徳』における授業づくりと評価』』。
- ・Society5.0に向けた人材育成に係る大臣懇談会（2018）『Society5.0に向けた人材育成～社会が変わる，学びが変わる』。
- ・田沼茂紀（2017）『道徳科授業のつくり方 パッケージ型ユニットでパフォーマンス評価』東洋館出版社。
- ・田村学（2017）『カリキュラム・マネジメント入門』東洋館出版社。
- ・納富信留（2020）『対話の技法』笠間書院。
- ・毛内嘉威（2018）『道徳授業のPDCA 指導と評価の一体化で授業を変える』明治図書。
- ・森田伸子（2011）『子ども哲学を——問いから希望へ』勁草書房。
- ・文部科学省『小学校学習指導要領』平成20年。
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 道徳編』平成20年。
- ・文部科学省『小学校学習指導要領』平成29年。
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳』平成29年。
- ・柳沼良太（2017）『道徳の理論と指導法』図書文化社。
- ・柳沼良太（2019）『平成30年度 第35回岩手県教育評価研究大会「新学習指導要領における道徳教育の在り方』』。
- ・吉本恒幸（2019）『平成30年度 第62回岩手県教育研究発表会「道徳科の授業と評価』』。
- ・リップマン，M.（2014）『探究の共同体——考えるための教室』河野哲也ほか監訳，玉川大学出版部。
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説』。
- ・『ちいさな哲学者たち』（DVD）ポッツィ，J.-P. & バルジエ，P. 監督，2012年，フランス。
- ・『ブタがいた教室』（DVD）前田哲監督，2009年，日本。